



最優秀賞

書評 堀辰雄著 『風立ちぬ 美しい村』 改版 (新潮社, 1987)

(BS/H01-2//H)

文学部3年 郷津 正

「風立ちぬ、いざ生きめやも」。意は、風が吹いた、さあ生きねばならぬ。堀辰雄の小説『風立ちぬ』に引用されるポール・ヴァレリーの詩の一片である。小説の主人公である「私」は、白樺の木陰で寝そべりながら、何処からともなく吹く風を感じてこの詩をつぶやく。風が吹いた、しかしなぜ生きねばならぬのか。意味もなくそよぐ風に、「私」はなにを感じたのだろうか。風が吹けば、木が揺れる。草はたなびき、花は散る。散った花びらは、ともに種を飛ばし、その種はまた新たな花を咲かす。風に実体はなく、目には見えないが、それは変化を告げていく。風が吹き、人はなぜ生きるのか。それは風の起こす、絶え間ない生の循環の中に帰ろうとするからである。変化の中に身をさらし、生まれ、生きて、死なねばならぬとを感じるからなのである。

小説『風立ちぬ』は主人公「私」が、その恋人・節子と過ごした愛の日々と、節子の死、そしてその後を描いた作品である。しかし節子の死は、正確に言えば描かれていない。空白なのである。彼女の死の予兆の後、物語は三年後の冬に移る。そして、三年後の冬、彼女の死のかげが残る谷へ「私」は向かうのである。そこで無口な村の娘とドイツ人の牧師と、かすかな交流を交わしながら「私」は節子のいない日々の意味を問う。

堀辰雄文学の特徴は、文章にある。その美しい文体は、幻想的で温かな空気を文章とともに読者に流し込む。秀逸なクラシック音楽を鑑賞したかのような読後感が残る。この作品にも堀のその特徴は例外ではない。舞台となる軽井沢の澄んだ空気や、美しい四季の色合いも登場人物たちの喜びや悲しみとともに鮮やかに映し出される。春の雪解けの空や、雪の純白な恐ろしさが、その小説世界の中に表わされている。

堀辰雄は、この作品を通して何を考えたのか。それは愛をなくした日々を生きる術であり、また死ぬ術であったのだろう。堀自身もまた、愛する女性を失った。その記憶を引きずりながら、彼は愛をなくした人生を生きる術を問うていたのだ。愛する人の死、そして自らにも迫りくる死を超えてどう生きるのか。愛する人と自らの死をその身に孕みながら生き、そして死んでいく決意、それを堀は考え、表現したのである。

死は、悲しい。死は分け隔てなく、我々を襲う。しかし、それは決して恐れるものではない。死するということは、愛する者の待つ生の循環のなかに帰っていくことである。物語の終わりに、「私」は独白する。「おれは人並み以上に幸福でも、又不幸でもないようだ」。「私」は冬の山小屋のなかに一人、遠くから吹いてくる風の余りに身を委ねながら悟るのであった。冷たく、悲しい「死」という出来事を、なお優しく抱擁すること。それが堀の出した生きる術の答えであり、また「生きめやも」の答えなのであろう。